

明解国語総合 現代文教材の内容

1 随想一

● ベトナムのコーヒー屋(角田光代) コミュニケーション

ベトナム旅行の際に逗留した海辺の町ニヤチャン。そこで屋台のコーヒー屋を営む親子とふと知りあつた筆者は、毎日のようにその店へ通うようになる。「どこの国のものでもない言葉で、あれやこれやと話しをしてはお互い意味をわかつたような気持ちになつてげらげらと笑つた」日々。忘れられない思い出を綴る滞在記。

● 負け方を習得する(内田樹) 生き方・考え方

昨今は「どうやって勝つか」ばかりを考え、決して「負け」を認めないのが風儀らしい。だが現実には、ほとんどの場合において私たちは、負けることが多いのではないか。「死ぬまで勝ち続けることは誰にもできない」ことを認め、負けることから学ぶ大切さを説く、「適切な負け方」のすすめ。

2 小説一

● 雪ウサギ(谷村志穂)

親友の「ベッカ」が遠くへ転校してしまつた「私」は、ひとりぼっちで取り残された気持ちで毎日を過していった。何をすることも自分からは動き出せない「私」は、あるとき「ベッカ」のかけたきた電話の言葉をきっかけに、彼女に会いに行くことを決心する。喪失の体験をおして少女が成長する姿を描く物語。

● とんかつ(三浦哲郎)

北陸の小さな宿に青森から泊まりにきた母子連れ。目的は近くにある禅宗の大本山に息子を入門させることだつた。夕食に母親は息子の好物のとんかつを所望し、二人はしんみりと別れの食事をする。翌年、けがをした息子の見舞いに訪れた母親の気持ちを感じた女将はとんかつを準備し、凜とした僧になつた少年は、匂いに気つくと思つて合掌して母親の部屋へと上がつていった。母子の情愛と、それを見つめる周囲の人間との交流を鮮やかに描いた小編。

3 詩

● 旅上(秋原朔太郎)

「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し……」初夏の風の中、遠い異国の地への憧れをみずみずしく描いた、朔太郎の詩壇デビュー作。

● シリウス(石津ちひろ)

冬の夜空で輝くシリウスのように際だつ「おもいのたけ」とはどのようなものか。限られた言葉でつづられた詩から、「わたし」の抱く「おもい」を想像する。清新な詩教材。

● シジミ(石垣りん)

夜中の台所で口をあけて生きている「シジミ」。それに向かつて「鬼ババ」のように笑う私も、うすすら口をあけて寝るしかない。日常のひとこまから、生の深淵をのぞかせる佳品。

4 評論一

● 魚は陸から離れられない(松浦啓一) 自然・環境

「魚は水さえあれば地球上のあらゆる所で生息できるといつても過言ではない」にも関わらず、全ての海水魚のおよそ八割が、全海洋の僅か八パーセントの浅い海にひしめいている。魚の生息環境とそこでの意外な生態や多様性、そしてそこから生まれる人間との深い結びつきを、豊富な写真とグラフとともにわかりやすく解明する。

5 随想二

● ツゴイネルワイゼン(黒柳徹子) 戦争

「チゴイネルワイゼン」は筆者にとつて、思い出深い曲の一つである。楽団員だつた父がよく弾いていただけでなく、戦時中に疎開した青森で偶然耳にして曲名を教えられたり、死後に届いた手紙によつて父親の軍隊での様子がわかるきっかけとなつたりするなど、父と自分をつなぐ導線となつた二曲の記憶。

6 小説二

● バスに乗つて(重松清)

入院した母を見舞いに病院へ通うため、一人でバスに乗るようになった小学校五年生の少年は、ことあるごとに同じ運転手のバスに乗り合わせる。母の入院が長引くにつれて不安が募る少年と、ぶつきらぼうな口調でささいな行動にも注意をする運転手とが織りなす人間模様が、少年の心情に寄り添いながら巧みに描かれる短編。

● セメント樽の中の手紙(葉山嘉樹)

発電所の建築現場で二日中セメントまみれでヘトヘトになるまで働く男、松戸与三。彼がセメント樽の中から見つけた木箱に入つていた手紙には、あまりにも衝撃的なことが書かれていた。プロレタリア文学を代表する作家が、自らの労働体験から生み出した、清新で率直な文体と当時のモダンな「探偵小説」的構成による短編。

7 短歌・俳句

近代の代表的な作品とともに、現代の最先端の作品にも焦点を当て、親しみやすく新しい選歌・選句で教材化した。

● 遠い片手 短歌九首

与謝野晶子・斎藤茂吉・岡本かの子・小島ゆかり・穂村弘・東直子・佐藤弓生・松村正直・永田紅の作品を収録。

● 麦わら帽子のへこみ(穂村弘)

石川啄木・俵万智・若山牧水の作品を例にあげながら、「共感」「驚異」「クビレ」をキーワードに短歌表現を分析し、なぜ短歌が人を感動させるのかを明らかにする鑑賞文。

● 春のオルガン 俳句十二句

正岡子規・高浜虚子・萩原井泉水・飯田蛇笏・橋本多佳子・中村汀女・加藤楸邨・篠原鳳作・森澄雄・鎌倉佐弓・浦川聡子・大高翔の作品を収録。

● 水の東西(山崎正和) 比較文化

鹿おどしと噴水から連想される西洋と日本との文化の違いを、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」といったキーワードを用いながら、二項対立の形式でわかりやすく説明する。

● 問題解決の心理学(堀井秀之) 心理脳

私たちは「問題解決」というと、何か難しいことだと考えがちだ。だが実際は無意識のうちに、日々直面する問題に対して、コンピュータより「はるかに効率的」に問題を解決している。人が膨大な情報の中から必要な情報を検索選択して問題解決につけるメカニズムを、「記憶」と「因果関係」をキーワードに論ずる。

9 随想二

● 働く喜び 技もつ体で(塩野米松) 仕事・労働

かつて「働くこと」は「生きること」だった。徒弟制度のような厳しい環境に置かれても、その先にあるものを見つめて生きることができた。「時間にかかる訓練を避け、効率の向上を目指し」、報酬が金銭に置きかえられるようになって、働くことの意味は変わった。「働くこと」の喜びの復権に向けて記す道しるべ。

● あたりまえなことにありがとう(池田晶子) 存在と認識

「ありがとう」という言葉には、「存在に対する感謝」ひいてはその先にある「もっと大きな何かに対する感謝」がこめられている。それは、あらゆる偶然の結果として生まれた「奇跡」への驚きの感情である。日々の「あたりまえ」の中にあるかけがえのなさを、自らの経験为例に語る幸福論。

● 羅生門(芥川龍之介)

『今昔物語集』に取められた「羅城門登上層見死人盗人語第十八」の逸話に想を得て、平安時代の荒廃した都を舞台に、生きるために自らの悪行を正当化しようとする老婆と下人の姿をとおして、人の心のありようを描く。近代短編小説を代表する作品。

11 評論三

● 届く言葉、届かない言葉(鷺田清二) 言葉

病院で本の朗読をねだりながら、母親が読みだすと別のことを始め、読み終わったり中断したりすると再読を要求する幼児。彼らが求めているのは本の内容ではなく、「母親の意識の宛先になつている状況」であり「私のみを宛先としている声」なのだ。人と社会との関係性から見える、声に秘められた役割と意味とを論ずる。